

## 創世記37-38章 「ヨセフとユダの証しするメシア」

### 1A 父からの愛 37

1B 兄たちの妬み 1-11

1C あや織りの長服 1-4

2C 支配者となる夢 5-11

2B ヨセフを売り渡す兄たち 12-36

1C シェケムとドタン 12-17

2C 穴に入れる兄たち 18-24

3C 奴隸として売る兄たち 25-30

4C 嘆き悲しむ父 31-36

### 2A 罪のため 38

1B カナンの女との結婚 1-11

1C 三人の息子 1-5

2C 遺される嫁タマル 6-11

2B 目覚めるユダ 12-30

1C 娼婦になるタマル 12-19

2C しるしを戻せないユダ 20-23

3C 間違いを知るユダ 24-26

4C 割り込みの息子 27-30

## 本文

創世記 37 章を開いてください。私たちは、ついにヨセフの生涯に入っています。

午前中にも言及しました。私たちが良く知っていること、また関心のあることと、実際に聖書で多くの紙面を割いている、大切なことは、ずれがあります。それは、神の創造について、多くの人が関心を持っているわけですが、もちろんそれは神の真理において根本になります。けれども、神の創造と、その後のノアの箱舟、それからバベルの塔に至る一連の話は、1 章から 11 章までになります。それに対して、主が召し出されたアブラハムと、その後の族長の話は、12 章から最後にまで至るのです。明らかに、主がアブラハムに約束し、また契約を結ばれたことに、神は多く伝えたことがあります。

そしてその族長の生涯において、アブラハム、イサク、ヤコブの生涯を、詳しく語っていますが、ヤコブの息子の一人、ヨセフを中心とした話は、ここ 37 章から最後の 50 章にまで至るのです。それはなぜか？アブラハムも、イサクも、またヤコブも、キリストにある信仰の歩みを指し示していま

すが、ヨセフは、まさにキリストご自身を証ししているからです。アブラハムがイサクを献げるところにおいて、父なる神が御子をお与えになることは証しされましたが、ヨセフに至っては、17歳の時から生涯に最後に至るんで、苦しみの後、栄光の中に入るという、キリストご自身の使命をこれほど明らかに証ししている生涯はありません。

そして後で、37章の後で、38章も読みますが、まるで異なる話のように見えます。ヨセフを奴隸として売った後に、ユダが何をしていたかについて、挿入して話していることです。この無関係に見える話は、実は深くつながっています。実に、ユダから出てくる子にメシアが現れます。

### 1A 父からの愛 37

#### 1B 兄たちの妬み 1-11

#### 1C あや織りの長服 1-4

<sup>1</sup>さて、ヤコブは父の寄留の地、カナンの地に住んでいた。

この言葉は、36章におけるエサウの系図との比較です。エサウの子孫は、セイルの地で首長となり、また王国となっていく歴史になっていますが、対してヤコブは、変わらずに父の寄留の地、カナンにいます。しかし、こここそが、神の約束によって生きる者たちの姿です。まず、私たちはあくまでも、この地上で「寄留」している者たちです。天に都を持っていました。ヤコブも変わりません。そして、初めは、弱々しく、小さいように見えても、主の約束は実現し、確かに祝福され、強くなります。

<sup>2</sup> これはヤコブの歴史である。ヨセフは十七歳のとき、兄たちとともに羊の群れを飼っていた。彼はまだ手伝いで、父の妻ビルハの子らやジルパの子らとともにいた。ヨセフは彼らの悪いうわさを彼らの父に告げた。

ヨセフがまだ十七歳でした。それで、兄たちが羊を飼っていましたが、彼はお使いのようなことをしていました。そして、ヨセフは特に、女奴隸であったビルハ、ジルパの息子たちと共にいました。ここからすでに、ヤコブの家庭内における問題を垣間見ます。ヤコブは、すべての妻を平等に愛していました。これまでの取り扱いで、それが分かります。ラケルを愛し、その次にレア、そして女奴隸には、特に愛情を注いでいたでしょうか？それが、息子たちにも影響を与えていました。

対してヨセフは、ここから見るとよくわかりますが、彼はそういった人間模様についてはよくわかりません。「無垢な人」というのが適切な表現でしょう。なので、彼はそのままを伝える人です。彼らの悪いうわさを父に告げていました。ここが、後に現れるキリストご自身にも通じます。主は、人の目をはばかることなく、そのままを伝えられました。人々の心にある深い部分、そこにある罪の問題を、そのまま明らかにされました。

<sup>3</sup> イスラエルは、息子たちのだれよりもヨセフを愛していた。ヨセフが年寄り子だったからである。それで彼はヨセフに、あや織りの長服を作つてやつていて。

思い出してください、ラケルはずつと不妊でした。最後の最後で、ようやく子を宿しました。ヨセフが生まれ、そして後期出産でベニヤミンが生まれましたが、その時、難産で自身が死にました。そういったことで、人間の自然の情ですね、年寄り子はかわいがります。このことを聖書注解していた牧者チャックは、自分の末娘シャーリーが、兄たちからちょっと冷たくあしらわれたことを話していました。自分自身が溺愛していたからですね。

そして、「あや織りの長服」です。あや織りについては、当時の文献では貴族や王族の着るものでした。長服は袖がある服ですが、労働のための作業服は邪魔になるので袖がありません。ですからこれは、ヨセフがヤコブの継承者のような意味合いがあるのです。

<sup>4</sup> ヨセフの兄たちは、父が兄弟たちのだれよりも彼を愛しているのを見て、彼を憎み、穏やかに話すことができなかった。

父により愛されているということが、兄たちが妬み、憎んだ理由です。そして、穏やかに話すことさえできなくなっていました。福音書を見れば、イエスがあれほど、宗教指導者に妬まれ、憎まれたのは、ご自身が父によって愛されていることが、彼らにも分かっていたからです。自分たちは、神のものを任されている管理者であるのに、所有者本人がやって来たというようなイメージです。農夫の喩えで、主人が息子を送ろうといったら、彼らは殺してしまいましたね。その構図です。

## 2C 支配者となる夢 5-11

<sup>5</sup> さて、ヨセフは夢を見て、それを兄たちに告げた。すると彼らは、ますます彼を憎むようになった。

ヨセフの見る夢は、神の啓示そのものです。ヨセフには、夢を見て、それを解き明かす力がありました。同じような人が後に出てきますね。そうです、ダニエルです。ダニエルとヨセフはとても似ています。ダニエルは、ネブカドネツアル王の見た夢を言い当て、また解き明かしました。自分自身も夢を見ました。ヨセフは、後にエジプトの宰相となります。王の次に権力を持っている人です。ダニエルは、バビロンの王の側近になりました。どちらも、異邦人の国です。それから、どちらも、大きな欠陥や過ちが書かれていません。全く過ちを犯していないということではありません、けれども、目だったことは何一つない人です。

神からの夢ですから、兄たちは、神からのものとして受けとめれば良かったのですが、あくまでもヨセフは弟であり、弟と兄という水平の関係でしか見ていませんでした。思い出すのですが、私が宣教の地で、日本の人々が住んでいて、その人に一度、聖書の学びをしました。そうしたら、ものす

ごく不機嫌になりました。すごい高圧的だと言うのです。そう、彼女は、聖書が言っていることが神のもの、上下の関係の話をしていると受け止めず、私が彼女に語りかけている、マウントを取つているように受け止めたのです。これが、兄たちがヨセフの見た夢に対する反応でした。

<sup>6</sup> ヨセフは彼らに言った。「私が見たこの夢について聞いてください。<sup>7</sup> 見ると、私たちは畑で束を作っていました。すると突然、私の束が起き上がり、まっすぐに立ちました。そしてなんと、兄さんたちの束が周りに来て、私の束を伏し拝んだのです。」<sup>8</sup> 兄たちは彼に言った。「おまえが私たちを治める王になるというのか。私たちを支配するというのか。」彼らは、夢や彼のことばのことで、ますます彼を憎むようになった。

神は実に、不思議な選びをしておられます。兄ではなく弟を選び続けておられることです。アブラハムの子では、イシュマエルではなくイサク。イサクの子では、エサウではなくヤコブでした。次の章、38章では最初に出てきたゼラフではなく、割り込んで出てきたペレツです。そしてヤコブは、ヨセフの息子二人に対して祝福する時に、わざわざ手を交差して、右手を、初めに生まれたマナセではなく、エフライムに置いたのです。神の選びというものが、かえって後のもの、弱いもの、目に留められない者に向かって、それでご自分の恵みを際立たせるということをしておられます。

ここでは、兄たちが弟にひれ伏すという夢です。これは、エジプトの宰相になってヨセフに、穀物を買いに来た兄たちがひれ伏すということで、実現します。そしてそれが、後に来られるメシア、キリストを証ししています。メシアは、ユダヤ人たちから出て、彼らの王となります。

<sup>9</sup> 再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。<sup>10</sup> ヨセフが父や兄たちに話すと、父は彼を叱って言った。「いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むというのか。」

ヨセフは、なんと父や母までもが、自分に伏し拝むという夢を見ました。それで、兄たちが良かつただけでなく、父が叱りました。ここでの夢では、太陽が父ヤコブで、月が母を示しています。そして他の星が兄たちのことです。

ところで、ここから私たちの思い出す、聖書の最後に書いてある話は何ですか？ そうです、默示録12章における、女と赤い竜の幻です。「12:1 また、大きなしるしが天に現れた。一人の女が太陽をまとい、月を足の下にし、頭に十二の星の冠をかぶっていた。」12章の女について、だれであるかの解釈があまりにもいろいろあるのですが、あまりにも明解です。イスラエルという国そのものです。ヨセフの見た夢のことです。

<sup>11</sup> 兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心にとどめていた。

ここが大事です、兄たちは妬みましたが、父は心に留めていました。これは、あまりにも突拍子のない夢なので、父や母に対する無礼を越えて、何か意味があるのか？と心に留めたのです。そして、何度も逡巡したことでしょう。

同じようなことをした人が福音書に出てきます。マリア自身です。イエスが12歳の時に、親から離れてエルサレムに留まっていました。母がその事を叱ったら、イエスが答えられました。「ルカ2:49-51すると、イエスは両親に言わされた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」50しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。51それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこれらのことのみを、心に留めておいた。」そうです、親に向かって、神殿において父の家にいると言ったのですから、失礼を越えて、突拍子もないことです。それで、マリアは心に留めていたのです。その意味がもちろん、後で分かります。この方は自分も含めて、主ご自身なのだということです。

私たちの信仰人生の中で、突拍子もないようなことが起こります。けれども、そこで心に留めるという行為が必要ですね。そのことが、もしかしたら神が何かをされていることかもしれないと思い巡らすことができるからです。

## 2B ヨセフを売り渡す兄たち 12-36

### 1C シェケムとドタン 12-17

<sup>12</sup>その後、兄たちは、シェケムで父の羊の群れを世話をするために出かけて行った。<sup>13</sup>イスラエルはヨセフに言った。「おまえの兄さんたちは、シェケムで群れの世話をしている。さあ、兄さんたとのところに使いに行ってもらいたい。」ヨセフは答えた。「はい、参ります。」<sup>14</sup>父は言った。「さあ、行って、兄さんたちが無事かどうか、羊の群れが無事かどうかを見て、その様子を私に知らせておくれ。」こうして彼をヘブロンの谷から使いに送った。それで彼はシェケムにやって来た。

兄たちは、ヘブロンからシェケムに向かいました。シェケムと言えば、そこにいた時にディナが凌辱を受け、シメオンとレビが虐殺と略奪を働いた町です。イスラエルは、気になったのでしょうか、また何かが起こるかもしれないと。それで、ヨセフに無事かどうか見て来てくれと願います。

<sup>15</sup>彼が野をさまよっていると、一人の人が彼を見かけた。その人は「何を捜しているのですか」と尋ねた。<sup>16</sup>ヨセフは言った。「兄たちを捜しています。どこで群れの世話をしているか、どうか教えてください。」<sup>17</sup>すると、その人は言った。「ここからは、もう行ってしまいました。私は、あの人たちが『さあ、ドタンの方に行こう』と言っているのを聞きました。」そこでヨセフは兄たちの後を追って行き、ド

タンで彼らを見つけた。

ヨセフは、シェケムに来ても兄たちがいなかつたので、さ迷いました。おそらく、痕跡のようなものがないのか探していたのでしょう。そこに、一人の人が、彼らがドタンに行ったと教えてくれました。ドタンは、さらに北に上がつたところにあります。今のジェニンという、パレスチナ人の町の中に遺跡があります。ここで大事なのは、ドタンが通商の要所になつてゐたことです。当時、エジプトとメソポタミアの間をつなぐ通商路が、海沿いには海沿いの道がありました。内陸、今のヨルダンのほうには「王の道」がありました。その二つの南北に走る道の間、東西に連結する道が走つてゐるのですが、ドタンは、その連結する道沿いにあつたのです。それで、あとでヨセフがエジプトに行く隊商に売られていく、ということになるのです。

## 2C 穴に入れる兄たち 18-24

<sup>18</sup> 兄たちは遠くにヨセフを見て、彼が近くに来る前に、彼を殺そうと企んだ。

恐ろしいですね、妬みが憎しみに、憎しみが殺意に変わります。たかが妬みだと思ってはいけません。実に、兄たちがヨセフを殺そうとしたように、イエスの時代の宗教指導者たちは、妬みによってイエスを十字架につけさせたのです。「ヤコブ 1:15 そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」妬みとは、主の恵みに対する不信です。主の恵みを自分が受けていないと、他の人から奪おうとします。

<sup>19</sup> 彼らは互いに話し合つた。「見ろ。あの夢見る者がやって來た。<sup>20</sup> さあ、今こそあいつを殺し、どこかの穴の一つにでも投げ込んでしまおう。そして、狂暴な獣が食い殺したと言おう。あいつの夢がどうなるかを見ようではないか。」

そう、彼らは夢に対して反発しているのです。夢によれば、俺たちがヨセフを捕することになるが、果たして殺してもそうなるか見てみようではないかと、神を試しているのです。同じようにして、イエスがご自身がよみがえり、また、神の子でありキリストであると言われたので、はたしてそのとおりになるか試してみようということで、彼を十字架に付けるように仕向けたのです。

<sup>21</sup> しかし、ルベンはこれを聞き、彼らの手から彼を救い出そうとして、「あの子を打ち殺すのはやめよう」と言った。<sup>22</sup> また、ルベンは言った。「弟の血を流してはいけない。弟を荒野の、この穴に投げ込みなさい。手を下してはいけない。」これは、ヨセフを彼らの手から救い出し、父のもとに帰すためであった。

ルベンは、12 人のうち長男です。それで、彼は長男として、しなければいけないことをしようとした。しかし、それは弟たちの悪事に対峙するのではなく、宥めて、あとで、自分で取り繕うとす

るものです。ルベンについて、私たちはすでに、彼が、ラケルの死後、ヤコブの側女ビルハのところに入ったのを読みました。それは、自分が父のもの取ることによって、父を凌駕しようとする行為であります。ヤコブが晩年にルベンのことを預言して、「49:4 だが、おまえは水のように奔放で、おまえはほかの者にまさることはない。」と言いましたね。水のような奔放さです。

彼は、善を求め、正しいことを求めましたが、中途半端なのです。そして、今ここで弟を殺すという悪事を働くとしています。ここからの教訓は、中途半端な正義は、あからさまな悪事に対して無力であるということです。

<sup>23</sup>ヨセフが兄たちのところに来たとき、彼らは、ヨセフの長服、彼が着ていたあや織りの長服をはぎ取り、<sup>24</sup>彼を捕らえて、穴の中に投げ込んだ。その穴は空で、中には水がなかった。

そうです、兄たちが憎んでいたのは、父からの寵愛の対象、父の物を受け継ぐ対象である長服です。それを剥ぎ取りました。そして、穴の中に入れています。午前礼拝の説教をぜひ聞いてください。そこで詳しく、聖書に出てくる穴についてお話ししました。貯水槽の跡であり、時にそこに水分が残っていて、泥になっていり、底なし沼のように沈むことさえあります。這い上がることのできない絶望を示しています。そして主イエスご自身が、カヤバ邸で死刑判決を受けた後に、そこにある穴に閉じ込められていたのです。

ここで、ヨセフがあわれみを願って叫んでいたことを、あとで兄たちが回想していることも、午前礼拝でお話ししました。(42:21)

### 3C 奴隸として売る兄たち 25-30

<sup>25</sup>それから、彼らは座って食事をした。彼らが目を上げて見ると、そこに、イシュマエル人の隊商がギルアデからやって来ていた。彼らは、らくだに樹膠と乳香と没薬を背負わせて、エジプトへ下って行くところであった。

ヨセフがあわれみを求めていたのに、彼らは食事ができるほどでした。良心の呵責がありません。

そしてそこに居合わせたのが、イシュマエル人の隊商です。先に果たしたようにドタンは、通商路の要所にありますが、東はギルアデです。ヤコブがちょうど、ラバンの家から出て行った時にギルアデを通っていました。イシュマエル人と言えば、エジプト人ハガルの息子イシュマエルの子孫です。彼らはエジプト方面に生きていました。こうやって、貿易商になっている者たちもいたのです。

<sup>26</sup>すると、ユダが兄弟たちに言った。「弟を殺し、その血を隠しても、何の得になるだろう。<sup>27</sup>さあ、ヨセフをイシュマエル人に売ろう。われわれが手をかけてはいけない。あいつは、われわれの弟、

われわれの肉親なのだから。」兄弟たちは彼の言ふことを聞き入れた。

ルベンが奔放な者、そしてシメオンとレビは、シェケムでかつて行ったように、横暴で暴虐な者でした。ですから、残りの兄弟で最も年上なのは、ユダです。彼が、兄弟たちの中でリーダーシップを発揮するような力を持っていました。彼は後にも、父を説得して、ベニヤミンをエジプトに連れて行ったり、またベニヤミンを弁護して、自分が身代わりになるとヨセフに執り成したのも、ユダです。そして、ユダから事実、王が出てきて、国全体を統治するようになります。

ここでユダが提案していることは、全くほめられたものではありませんが、殺さないということについては留めることができました。弟であり、肉親なのだから、あわれみをかけようということです。そして、奴隸として売れば、得するし、と兄弟たちを説得できています。

<sup>28</sup> そのとき、ミディアン人の商人たちが通りかかった。それで兄弟たちはヨセフを穴から引き上げ、銀二十枚でヨセフをイシュマエル人に売った。イシュマエル人はヨセフをエジプトへ連れて行った。

ミディアン人は、アブラハムがサラの死後、めとったケトラから生まれた息子がミディアンで、その子孫です。この隊商は、イシュマエル人とミディアン人の混成だったようです。この隊商に、ヨセフが銀二十枚で売りました。奴隸の価格です。午前礼拝でも話しましたように、同じようにして、イスカリオテのユダが、イエスを宗教指導者らに売ったのです。

<sup>29</sup> さて、ルベンが穴のところに帰って来ると、なんと、ヨセフは穴の中にいなかった。ルベンは自分の衣を引き裂き、<sup>30</sup> 兄弟たちのところに戻って来て言った。「あの子がいない。ああ私は、私は、どこへ行けばよいのか。」

ルベンのはかりごとは、全くうまくいきませんでした。弟たちが食事をしている時に、彼はどこに行っていたのでしょうか？リーダーとしての力がないですね。

#### 4C 嘆き悲しむ父 31-36

<sup>31</sup> 彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎを屠って、長服をその血に浸した。<sup>32</sup> そして、そのあや織りの長服を父のところに送り届けて、言った。「これを見つけました。あなたの子の長服かどうか、お調べください。」<sup>33</sup> 父はそれを調べて言った。「わが子の長服だ。悪い獣が食い殺したのだ。ヨセフは確かに、かみ裂かれたのだ。」

ヤコブは、かつて父イサクを、毛皮によってエサウと偽り、だました。今は、息子たちによって、長服がやぎを屠った血によって浸したものを見て、だまされました。

<sup>34</sup> ヤコブは自分の衣を引き裂き、粗布を腰にまとい、何日も、その子のために嘆き悲しんだ。<sup>35</sup> 彼の息子、娘たちがみな来て父を慰めたが、彼は慰められるのを拒んで言った。「私は嘆き悲しみながら、わが子のところに、よみに下って行きたい。」こうして父はヨセフのために泣いた。

父は、立ち上ることはませんでした。ヨセフの死によって悲しみながら、陰府に下ると言っています。ここで、名前がイスラエルからヤコブに戻っています。自分の中に閉じこもってしまったことで、神の視点を見失ったからでしょう。次を見てください。

<sup>36</sup> あのミディアン人たちは、エジプトでファラオの廷臣、侍従長ポティファルにヨセフを売った。

ヨセフは死んでいませんでした。これが神のなされていることです。私たちも、今、見ている状況証拠のようなもので、すべてを決めてしまっていることがないでしょうか。自分の見ていることは、ごく一部であり、自分の判断していることは、往々にして間違っているかもしれないということを知る必要があります。

ところで、ここに大きな神の御手、導きがあります。売られたのが、どこかよく分からない人ではなく、ファラオに非常に近い人、廷臣であり侍従長ポティファルだったのです。ファラオに近い人の奴隸になったからこそ、ファラオの前に後に出るという機会を得ました。

## 2A 罪のため 38

### 1B カナンの女との結婚 1-11

### 1C 三人の息子 1-5

<sup>1</sup> そのころのことであった。ユダは兄弟たちから離れて下って行き、名をヒラというアドラム人の近くで天幕を張った。

38 章は、ヨセフの話から、ユダの話に移っています。ヨセフをエジプトに奴隸に売り、それから父が悲しみに沈んでいる中で、その家はかなり荒んでいたのではないかと思われます。そんなところに居たないと、ユダは思ったのかもしれません。そして、ユダ自身が、信仰的に後ずさりする姿を見ます。彼は、アドラムというカナン人の町に動きました。ヘブロンより北西です。ユダの山地と地中海の沿岸地域の間にある、シェフェラという地方にあります。ヒラという人と仲良くなります。

<sup>2</sup> そこでユダは、カナン人で名をシュアという人の娘を見そめて妻にし、彼女のところに入った。

アブラハムもイサクも、非常に注意してカナン人から妻をとらないようにしていました。それでヤコブは、わざわざパダン・アラムを行ったのです。今や、パダン・アラムはラバントの確執で、ミツパの契約を結んでいます。だから、もはや親戚のところに行くこともできません。ユダは、信仰的に自

暴自棄になって、そこにいる娘を妻にしたのです。

<sup>3</sup> 彼女は身ごもって男の子を産んだ。ユダはその子をエルと名づけた。<sup>4</sup> 彼女はまた身ごもって男の子を産み、その子をオナンと名づけた。<sup>5</sup> 彼女はまた男の子を産み、その子をシェラと名づけた。彼女がシェラを産んだとき、ユダはケジブにいた。

ここで注意して見ないといけないのは、だれが息子に名を与えていたかです。エルは、ユダが名づけています。ところが、次男のオナン、三男のシェラは、妻が名づけています。ここから分かるのは、ユダがイスラエルの子として、息子に影響を与えるその力が失われていることです。勝手にしないといふ感じだったのでしょうか。父親が名づけるものですから、育児放棄みたいになっています。シェラを妻が出産した時、ユダ自身は、アドラムから少し西に行ったケジブにいました。

## 2C 遺される嫁タマル 6-11

<sup>6</sup> ユダはその長子エルに妻を迎えた。名前はタマルといった。

当時は恋愛結婚というものはありません。父が決めます。それで、同じくカナン人のタマルをエルのためにお嫁さんにしました。

<sup>7</sup> しかし、ユダの長子エルは主の目に悪しき者であったので、主は彼を殺された。

そうです、ユダの子ですから、主に対する信仰を受け継がなければいけません。ところが、カナン人であるエルは、そのことを憎み、反抗し、意図的に主を侮ったと思われます。それで、主が彼を殺されたとあります。

<sup>8</sup> ユダはオナンに言った。「兄嫁のところに入って、義弟としての務めを果たしなさい。そして、おまえの兄のために子孫を残すようにしなさい。」

これは、後にモーセの律法にもなる結婚のしきたりです。夫が先立たれた時に、やもめになったその妻に対して、弟が結婚して、それで兄の名を残されなければいけないというものです。

ルツ記を見れば、それが実践されている様子がうかがえます。ナオミの夫エリメレクの土地を買い戻すために、近親者が出てきて買おうとしました。けれども、エリメレクの息子の妻であったルツがおり、ルツを自分の妻にしなければいけないことが分かった時に、それをお断りました。それで、その次に近い親戚であるボアズが出てきて、エリメレクの名を残すために彼が夫となったということです。その他に、サドカイ派の者が、イエスに詰問をした時に、一人の妻が結婚するも、兄弟が七人も続けて死んでいった場合、復活したら誰の妻になるのか?ということです。それで、ユダは

義弟としての務めを果たしなさい、兄のために子孫を残すのだと言いました。

<sup>9</sup> しかしオナンは、生まれる子が自分のものとならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないように、兄嫁のところに入ると地に流していた。<sup>10</sup> 彼のしたことは主の目に悪しきことであったので、主は彼も殺された。

ここで問題なのは、体外射精したことではありません。それ自体ではなく、兄のために子を残すことを拒んだことです。ユダの子として、タマルから子を設けることを拒んだことで、それが主の目に悪しきことでした。ここにも、アブラハムに対する神の契約が働いているのです、イスラエルの名を残すことを敢えて拒むことによって、自らの呪いを招いたのです。

<sup>11</sup> ユダは嫁のタマルに、「わが子シェラが成人するまで、あなたの父の家でやもめのまま暮らしなさい」と言った。シェラもまた、兄たちのように死ぬといけないと思ったからである。タマルは父の家に行き、そこで暮らした。

ユダは、二人の息子が死んでしまったので、三男にはそうなってほしくないと願い、タマルを彼女の父の家に戻しました。今度は、ユダ自身が主に誤ったことをしています。

## 2B 目覚めるユダ 12-30

そこで主は、ユダに靈的に目覚めさせるようなことをお許しになります。

## 1C 娼婦になるタマル 12-19

<sup>12</sup> かなり日がたって、ユダの妻、すなわちシェアの娘が死んだ。その喪が明けたとき、ユダは、羊の群れの毛を刈る者たちのところ、ティムナへ上って行った。友人でアドラム人のヒラも一緒であった。

ユダと妻の間は、冷え切っていたのではないかと思われます。喪の期間が過ぎたら、彼は、ちょっとせいせいした気分だったのでしょう、友人のアドラム人ヒラといっしょに、羊の群れの毛を刈る祝いのところに行きました。これは、いわゆる飲み会のようなもので、どんちゃん騒ぎをする機会でもあるのです。ティムナは、アドラムよりも北にあるところ、ここもシェフェラ地方です。

<sup>13</sup> そのときタマルに、「ご覧なさい。あなたのしゅうとが羊の群れの毛を刈るために、ティムナに上って来ます」という知らせがあった。<sup>14</sup> それでタマルは、やもめの服を脱ぎ、ベールをかぶり、着替えをして、ティムナへの道にあるエナイムの入り口に座った。シェラが成人したのに、自分がその妻にされないことが分かったからである。

そうです、元々、ユダはシェラをタマルに与えるつもりはなかったのです。ここにおいて、ユダは主に逆らっていました。ところで、シェラですが後に彼は、別の人と結婚をして、シェラ族という、一つの氏族を形成しています(民数 26:20)。

そしてタマルが、遊女の変装をして、ティムナに向かっています。息子をくれないのであれば、そのオリジナルである父と寝る、ということです。倫理的なことは、カナン人ですから問題にしません。何でもあります。けれども、妻として子を残すということは、文化的に必須でした。子もおらず、やもめのままというのは、あってはならない屈辱でした。それで娼婦の格好をしたのです。ベールをかぶるのは、結婚式の時に花嫁がすることですが、それを日常の中で行うのは、娼婦であることを表していました。

<sup>15</sup> ユダは彼女を見て、彼女が顔をおおっていたので遊女だと思い、<sup>16</sup> 道端の彼女のところに行き、「さあ、あなたのところに入らせてほしい」と言った。彼は、その女が嫁だとは知らなかったのである。彼女は「私のところにお入りになれば、何を私に下さいますか」と言った。<sup>17</sup> 彼が「群れの中から子やぎを送ろう」と言うと、彼女は「それを送ってくださるまで、何か、おしるしを下されば」と言った。<sup>18</sup> 彼が「しるしとして何をやろうか」と言うと、「あなたの印章とひもと、あなたが手にしている杖を」と答えた。そこで彼はそれを与えて、彼女のところに入った。こうしてタマルはユダのために子を宿した。<sup>19</sup> 彼女は立ち去って、そのベールを外し、やもめの服を着た。

ユダは、自分が、妻がいなくなつて解放されたと思ったのでしょうか、買春をしました。ところが、この不埒な行為を、主は彼を戒めるための道具として用いられたのです。相手は自分の嫁でした。そしてタマルは、後で自分がユダと寝たことを証拠としてつかむために、彼の持ち物、印章とひも、そして杖を受け取りました。

### 2C しるしを戻せないユダ 20-23

<sup>20</sup> ユダは、その女の手からしるしを取り戻そうと、アドラム人の友人に託して子やぎを送ったが、彼はその女を見つけることができなかった。<sup>21</sup> その友人がその土地の人々に「エナイムの道端にいた娼婦はどこにいますか」と尋ねると、彼らは「ここに娼婦がいたことはありません」と答えた。<sup>22</sup> 彼はユダのところに戻って来て言った。「あの女は見つかりませんでした。あの土地の人たちも、ここに娼婦がいたことはない、と言いました。」<sup>23</sup> ユダは言った。「われわれが笑いぐさにならないように、あの女にそのまま取らせておこう。私はこの子やぎを送ったけれども、あなたはあの女を見つからなかつたのだから。」

自分の印章、ひも、そして杖を取り戻せません。そもそも、彼は友人に託して、子やぎを送りました。また、買春をしたことがばれるほうが、恥ずかしいからです。

### 3C 間違いを知るユダ 24-26

<sup>24</sup> 三ヶ月ほどして、ユダに、「あなたの嫁のタマルが姦淫をし、そのうえ、なんとその姦淫によって身ごもっています」と告げる者があった。そこでユダは言った。「あの女を引き出して、焼き殺せ。」

すごい強い反応をしていますね。焼き殺せと言っています。どれほど、それが破廉恥な行為なのだとユダは知っていましたが、自分自身はその破廉恥な行為をしていたのです。「ロマ 2:1 ですから、すべて他人をさばく者よ、あなたに弁解の余地はありません。あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。」そこで、主は、ユダに、静かに叱責を与えます。嫁のタマルを通してです。

<sup>25</sup> 彼女が引き出されたとき、彼女はしゅうとのところに人を送って、「この品々の持ち主によって、私は身ごもったのです」と言った。また彼女は言った。「これらの印章とひもと杖がだれのものか、お調べください。」<sup>26</sup> ユダはこれを調べて言った。「あの女は私よりも正しい。私が彼女をわが子シェラに与えなかつたせ이다。」彼は二度と彼女を知ろうとはしなかつた。

ここです、ユダは靈的に目覚めました。「あの女は私よりも正しい」と言っています。本当は、シェラを与えるなければいけませんでした。だから、自分から子種を残さないといけないとしたのがタマルです。そして、「彼は二度と彼女を知ろうとはしなかつた」とは、悔い改めのしるしです。主に対する恐れを抱いたのでしょうか。

### 4C 割り込みの息子 27-30

<sup>27</sup> 彼女の出産の時になると、なんと、双子がその胎内にいた。<sup>28</sup> 出産の時、一人目が手を出したので、助産婦はそれをつかみ、その手に真っ赤な糸を結び付けて言った。「この子が最初に出て来ました。」<sup>29</sup> しかし、その子が手を引っ込めたとき、もう一人の兄弟が出て來た。それで彼女は「何という割り込みをするのですか」と言った。それで、その名はペレツと呼ばれた。<sup>30</sup> その後で、手に真っ赤な糸を付けた、もう一人の兄弟が出て來た。それで、その名はゼラフと呼ばれた。

先ほども話したように、ヤコブとエサウの間に起こったようなことが、起こりました。弟が割り込んで、自分が先に出てきました。割り込みという意味を持つ、ペレツという名が付けられました。そ

そこで、とても大事なのは、マタイ 1 章の、イエス・キリストの系図なのです。「1:1-3 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。2 アブラハムがイサクを生み、イサクがヤコブを生み、ヤコブがユダとその兄弟たちを生み、3 ユダがタマルによってペレツとゼラフを生み、ペレツがヘツロンを生み、ヘツロンがアラムを生み、」

そうです、ここでタマルの名があるのです。そしてペレツが生まれ、ペレツがユダの後を受け継ぎ

ます。さらに、ここには5節を見れば、カナン人ラハブの名が出てきて、さらにモアブ人ルツの名が出てきます。さらに、6節にはダビデが、ウリヤの妻バテ・シェバによってソロモンを生んだということも出ているのです。系図には、女の名は普通でできません。けれども、敢えてマタイは、タマル、ラハブ、ルツ、そしてウリヤの妻とわざわざ書き残しているのです。彼女らはユダヤ人ではなく、かつ、特異な状況の中にいた人々です。その中から、メシアが現れ、そのメシアがイエスなのです。

ある時、興味深い動画を見ました。超正統派のユダヤ教の女性が、隠れてイエスをメシアとして信じているという証言です。今もその共同体の中にいるので、顔を隠していました。どうして、信じるに至ったのか？というと、信じた時は新約聖書を読んでもいなかったというのです。彼女の知っているメシアは、「非常に特異な状況からメシアが現れている」というものなのです。それで、タマルによってペレツが生まれたこと、モアブ人ルツによって生まれていることなど、それで、イエスが処女から生まれ、私生児だと疑われていたような方であり、特異な状況から生まれていたから、と言う根拠でした。これは、驚きました。

私たちの主、メシアは、ヨセフが証しをし、またユダの子孫から生まれます。苦しみを受ける方であり、また罪の中、特殊な中から生まれて来られます。ここに、私たちはむしろ希望を見出すのです。主は、私たちの間に住んでください、しかも罪を負われて苦しまれた方です。